

# Nature 論文選定に関する俗説

## Nature's choices

2010年2月18日号 Vol. 463 (850)

**Nature**に掲載される研究論文に関して、選定方法と選定理由について誤った俗説がなお幅を利かせている。それらについて明確に反論する。

科学が導き出した結論に対する論争は、知らないうちに科学に対する国民の信頼を損なう効果がある。それは気候変動に関する新聞や雑誌の報道からも明らかだ。学術論文誌は、科学のプロセス（創造過程）を伝えるという重要な役割を担うため、我々が *Nature* に掲載する研究論文を選ぶ方法をきちんと説明し、研究コミュニティの内外で知り得た「誤解」をいくつか取り上げて論じることは、意味があると思われる。

一向に消える気配がない第一の俗説は次のようなものだ。*Nature* の編集者はインパクトファクターを上げるため、投稿論文（昨年は約1万6000本）の中から高い引用率が見込まれる論文を探し出そうとしている、と。もちろん我々は、そんなことはしていない。論文の被引用数は予測が難しく、重要性の尺度としての信頼性も低いからだ。

一例として、2006年6月に発表された有機合成化学の2つの論文を挙げよう。第一の論文は「3段カスケード有機触媒反応における4つの立体中心の制御 (D. Enders *et al.* *Nature* 441, 861-863; 2006)」で、被引用数は、2009年後半までに182となり、2006年に *Nature* に掲載された化学論文のうち4番目に被引用数が多かった。第二の論文は「2-キヌクリドニウム・テトラフルオロボレーートの合成および構造解析 (K. Tani and B. M. Stoltz *Nature* 441, 731-734; 2006)」で、2009年後半までの被引用数は13であった。しかし米国化学会が発行する雑誌 *Chemical and Engineering*

*News* において、傑出した研究成果と評されたのは第二の論文の方だった。

実際、*Nature* に掲載される論文のうち、被引用数が数十回のは、数百回のものよりもはるかに数が多い。それでも *Nature* のインパクトファクターで大きな割合を占めるのは、後者の方なのだ。我々は、本誌に掲載されるすべての論文に誇りをもっている。

もう1つ長く語り継がれている俗説に、「レフェリー（査読者）の1人が論文不受理と判断すれば、論文は掲載されない仕組みになっている」というものがある。しかし、レフェリー全員が失望した論文を我々独自の価値評価に基づいて掲載した事例が、昨年でも数件あった。こうした内部評価を下すことは、我々の担う役割の中でも常に中心的なものとなってきた。これは、*Nature* に編集委員会が設置されてこなかったことによる。*Nature* の編集者は、1年のうちの数週間は学会に出席したり研究室を訪問し、文献に目を通すことも決して怠らない。

掲載可否の審査対象となる論文は、2人以上のレフェリーが審査にあたり、学際的な論文の場合には、レフェリーが増員される。技術的問題点が指摘されれば、我々は適切な対応を取り、論文について重要と思われる点、欠けていると思われる点に関するレフェリーの意見を尊重する。しかし、論文に書かれた手順や方法が深い洞察力に基づいているかどうか、あるいはデータ源としての価値、さらには画期的な技術に結びつく可能性、

といった要件に基づいて最終判断をするのは我々なのだ。

また我々は、特定の著者の身元あるいは所在地によって決定が左右されない、という厳しい原則に基づいて運営している。*Nature* 掲載論文のほとんどすべては、複数の著者によっており、複数の出身国になっていることも多い。たまたま著名な科学者や話題の科学者が著者に名を連ねた論文が不受理になることも珍しくない。

「特定の研究分野では、少数の特権的なレフェリーに依存している」という俗説もある。しかし実際に、*Nature* では、昨年1年間に約5400人のレフェリーを起用し、常に新しいレフェリー、特に最新技術に直接かかわっている若手専門研究者を採用している。また、レフェリーは、科学先進国各国から起用している。そのレフェリーが *Nature* で論文発表しているかどうかは関係ない。ただし、対応の遅さに定評のある研究者の採用は控えている。競争の激しい分野では、著者の希望と我々独自の判断に基づいて、利益相反が明らかなレフェリーの採用は回避している。

学術論文誌に関する俗説は、これからも語り継がれていくであろう。我々のできることは、我々が結集できる最高の科学を読者に提供するという飽くなき探求を続けることであり、ここで述べた編集過程の堅牢性と客観性を、今後もできるかぎり保っていく努力を続けることだと信じている。

（翻訳：菊川愛）